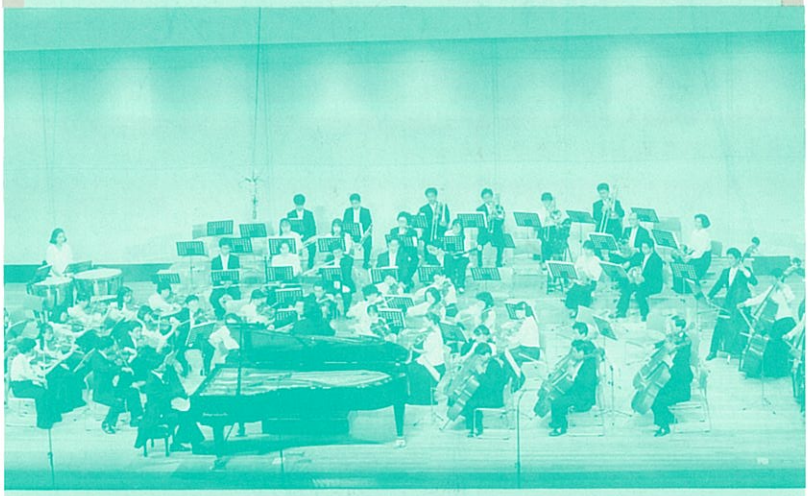
春日井市交響楽団

第５回定期演奏会

KASUGAI CITY
PHILHARMONIC
ORCHESTRA



1996年7月14日(日)

春 日 井 市 民 会 館

主催／春日井市交響楽団　共催／春日井市
後援／愛知県教育委員会・春日井市教育委員会・中日新聞本社

ごあいさつ

春日井市交響楽団
会長

山　田　和　夫

本日は、「春日井市交響楽団第５回定期演奏会」にようこそおいでくださいました。「カポ」の愛称で親しまれております春日井市交響楽団も、市民のみなさまのご支援のおかげで、創立してから５年がすぎて、「春日井市の文化の顔」といわれるようになりました。当時、小学生や中学生であった小さな団員たちも、もうすっかり大きくなって、高校の音楽科へ進んでいる人もいます。

ある時から、「オーケストラで演奏したい」「多くの人に聴いてほしい」という、春日井市のアマチュア演奏家たちが集まって、オーケストラを作る機運が高まってきました。春日井市も、「ぜひ、この街にみんなのオーケストラがほしい」と応援して下さいました。双方の願いが合わさって出来たのがカポです。年に一度の定期演奏会と「春日井市民第九演奏会」への参加が主な活動ですが、今回は、ナポリからお招きしたマエストロ・フランチェスコ・ニコロージ Maèstro Francesco Nicolosi と一緒にベートーヴェンの「皇帝」を演奏することになりました。ニコロージ氏に心からお礼申し上げます。

“Grazie Maèstro Francesco Nicolosi”

こういった、国際的な演奏家たちとの協演を通して、春日井市の「海外に開かれた文化の窓」となることもこれからのカポの使命の一つだと思っております。カポのさらなる発展に向けて、なお一層のご支援をお願いいたします。

今回もまた、指揮を竹本泰蔵先生にお願いすることができました。それでは、竹本先生のご指導のもと、さらに上達したカポの演奏をごゆっくりお楽しみ下さい。

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
鵜　飼　一　郎

春日井市交響楽団の記念すべき第５回定期演奏会を、市民の皆様とともに鑑賞できますことを心から喜びたいと思います。

平成２年11月の結成以来、早いもので５年有余の歳月が流れました。この間、定期演奏会をはじめ、演奏旅行、春日井市民第九演奏会における管弦楽の担当など、着実に実績を積み重ね、皆様に親しまれる市民オーケストラとして成長してまいりました。これもひとえに関係各位のご尽力と、市民の皆様の温かいご支援の賜物と感謝申し上げます。

今回は、第３回定期演奏会からご指導いただいております竹本泰蔵さんを指揮者として、また、ソリストにはイタリアからフランチェスコ・ニコロージさんをお招きしております。春日井市交響楽団にとりまして、これまでの集大成とも言える演奏会になるものと大変楽しみにしております。

音楽は、人の心の潤いとやすらぎをもたらします。カポの演奏をとおして、より一層音楽を愛する人々の輪が広がり、さらに大きな音楽文化の花が開くことを期待して、ごあいさつといたします。

PROGRAM

フンパーディンク作曲
Engelbert Humperdink (1854-1921)

歌劇「ヘンゼルとグレーテル」序曲
Opera 〝Hänsel und Gretel〟 overture

ベートーヴェン作曲
Ludwig van Beethoven (1770-1827)

ピアノ協奏曲第５番「皇帝」　変ホ長調　作品73
Konzert für Klavier und Orchester No.5 〝Emperor〟 op.73

第１楽章　アレグロ　変ホ長調 4/4拍子
第２楽章　アダージョ・ウンポコモッソ　ロ長調 4/4拍子
第３楽章　ロンド・アレグロ　変ホ長調 6/8拍子

++　《休　憩》　++

ドボルザーク作曲
Antonin Dvořák (1841-1904)

交響曲第８番　ト長調　作品88
Symfonie No.8 op.88

第１楽章　アレグロ・コン・ブリオ　ト長調 4/4拍子
第２楽章　アダージョ　ハ短調 2/4拍子
第３楽章　アレグレット・グラチオーソ　ト短調 3/8拍子
第４楽章　アレグロ・マ・ノントロッポ　ト長調 2/4拍子

指　　揮　竹本泰蔵
Taizo Takemoto

ピアノ独奏　フランチェスコ・ニコロージ
Piano *Francesco Nicolosi*

※本日使用のピアノ（ベーゼンドルファー インペリアル）は日本ベーゼンドルファー社から提供を受けました。

プロフィール

指揮　竹本泰蔵
Taizo Takemoto

1956年　神戸生まれ。
1974年　京都市立芸術大学音楽学部作曲科に入学し、翌年指揮科に転科。その間、広瀬量平、阿部幸明、保科洋、及び山田一雄の諸師に師事。
1976年　名古屋フィルにヴィオラ奏者として入団。
1977年　カラヤン・コンクール・イン・ジャパンでベルリンフィルを指揮、第２位に入賞。
1978年　日本ユースシンフォニーの指揮者としてロンドンでデビュー。同年、カラヤンの招きによりベルリンフィルで２年間研修を行い、親しい指導をうける。
1981年　名古屋フィルアシスタントコンダクター就任を経て、現在コンサート、オペラ、バレエ、ミュージカルの公演指揮の他、編曲、ラジオ番組でパーソナリティーを務める等多方面に活躍中。

管弦楽　春日井市交響楽団
KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA

平成２年11月、春日井市民によるアマチュアオーケストラとして設立。以来、創立記念演奏会（平成３年１月）・第１回定期演奏会（平成４年１月）・第２回定期演奏会（平成５年１月）・第３回定期演奏会（平成６年７月）など毎年自主演奏会を開催している。平成５年12月、春日井市制50周年記念「第九演奏会」（指揮：石丸　寛）には128名の特別編成の大オーケストラで参加した。第４回定期演奏会（平成７年７月）（愛知県文化活動事業費補助金・広域的芸術文化事業対象事業）では竹本泰蔵氏の指揮によりブラームス作曲交響曲第１番他を演奏し好評を得た。定期演奏会の他、市民第九演奏会での管弦楽担当、演奏旅行、音楽教室や市役所でのコンサートなど活発に演奏活動を行っている。
愛称『カポ』は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったものである。

山本耳鼻咽喉科
医師　山本節子
看護婦さんパート募集中
春日井市高蔵寺町北３丁目５－10　☎〈0568〉51－7887

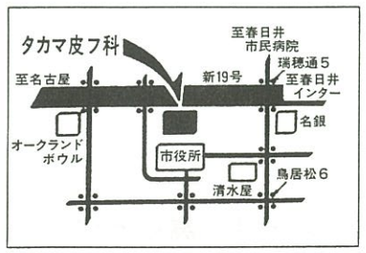
ピアノ独奏　フランチェスコ・ニコロージ
piano　Francesco Nicolosi

現在ナポリに住むフランチェスコ・ニコロージは、伝統あるナポリ音楽の正統的な後継者で、リストやリストのライバルであったタールベルクの超絶的なピアノ編曲用「トランスクリプション」を得意としている。ニコロージは、1954年シチリア島のカターニアに生まれた。カターニアは、有名なオペラ作曲家ベルリーニの生地。最初、故郷にあるヴィンツェンツォ・ベルリーニ音楽院でジョバンナ・フェルロの指導を受け、次に、ナポリでヴィンツェンツォ・ヴィターレに学んだ。1980年サンタンダー国際コンクールで３位を獲得、同月ジェノバ市でモーツァルトの「ピアノ協奏曲」ニ短調の演奏でクララ・ハスキル賞１位なしの２位に入賞。その後数々の賞と名声を手に入れた彼は、多くの有名オーケストラと共演。韓国人チェリストのミャン・ウォー・チャンやルカ・シニョリーニと組んで室内楽でも活躍。ヨーロッパの有名なコンサート・ホールを中心に、ロンドン、パリ、ミラノ、マドリード、ミュンヘン、ウィーン、ペテルスブルク、香港などで演奏会を開いている。また、多くの音楽祭にも出演。例えばドゥ・モンディ・スポレート・フェスティヴァル、ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル、プレシアとベルガモ国際音楽祭、タオミーナ劇場音楽祭、セティマーネ・ムジカリ・ディ・ストレーサ、セヴィリアのマラトーナ国際音楽祭、トリノのセッテンブレ音楽祭など。1984年に最初のCDを録音。ベルリーニとリストとタールベルクの難曲ばかりを集めたもの。1988年イタリアでタルベルクの「ピアノ協奏曲」ヘ短調を初演。「マルコ・ポーロ・レーベル」でタールベルクの「イタリア・オペラ・パラフレーズ集」を４枚組のＣＤに録音。「ナクソスレーベル」のモーツァルト「ピアノ変奏曲全集」も好評。今回初来日。

米津俊広氏（合奏指導）
愛知教育大学音楽科卒。在学中にチェロを弾く傍ら、学生指揮を担当。
現在、東京音楽大学の聴講生として紙谷氏の下で指揮の研鑽に励む、調布市在住。

中川さと子氏（弦トレーナー）
東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。伊藤美佐子、永田真理子、海野義雄、阿部靖の各氏に師事。
ナゴヤシティ管弦楽団コンサートマスターを経て、現在日本室内楽アカデミーメンバー。

木下美奈氏（ピアノ）
愛知県立明和高校音楽科卒。名古屋音楽大学ピアノ専攻を首席で卒業。現在、藤井博子氏に師事。

タカマ皮フ科
春日井市 鳥居松 新19号沿
☎(0568) 84－3165


本日の演奏曲目

みなさま、ようこそ春日井市交響楽団第５回定期演奏会においで下さいました。今日も、楽団員はみんな張り切っています。指揮はおなじみの竹本泰蔵さん。団員との息もぴったりあって、きっと素晴らしい演奏をお聴かせすることでしょう。さあ、始めましょう――みなさまを楽しいメルヘンにお誘いするフランパーディンクの「ヘンゼルとグレーテル」序曲。ドヴォルザークのもっとも詩的な「交響曲第８番」。協奏曲の最高作品、ベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第５番」。ピアノは、マエストロ・フランチェスコ・ニコロージ。豪快な「皇帝」が期待されます。（都築正道）

歌劇《ヘンゼルとグレーテル》序曲

ウンゲルベルト・フンパーディンク（1854－1921）作曲

フンパーディンクは、ワーグナーから直接教えを受けた数少ない作曲家です。1880年５月のある日、彼の妹ヴェルテ夫人アーデルハイトが夫の誕生日を祝うために、グリム童話の「ヘンゼルとグレーテル」をもとにした家庭劇を書きました。彼は、それを３幕の「ジングシュピール」（ドイツ語のオペラ）に仕上げました。初演は、1893年12月23日にリヒャルト・シュトラウスの指揮でワイマール宮廷歌劇場で行なわれました。大成功でした。またたく間に人気オペラとなり、いまでは、クリスマス・シーズンに世界中の歌劇場で各国語で上演されています。カポも、ぜひ一度、全曲上演したいものです。

さて、この序曲ですが、たくさんある劇中の美しいメロディを、花をつむように集めて作った「ポプリ序曲」です。メロディといっても、音楽が言葉のようにオペラの状況を説明する「示導動機」（ライトモティーフ）ですから、みなさまも、「ヘンゼルとグレーテル」の物語を思い出しながら、想像力豊かにお聴き下さい。クリスマスらしく「祈りの主題」がホルンで静かに始まります。「魔法を解く動機」につづいて、クライマックスは子供たちの「喜びの歌」です。ショウガのクッキーにされていた子供たちは、魔法が解けて、みんな生き生きと動きだし陽気に踊り騒ぎます。最後は、また「祈りの動機」にもどって静かに終わります。

ピアノ協奏曲第５番《皇帝》

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770－1827）作曲

ベートーヴェンの最後のピアノ協奏曲で、彼の最高傑作の一つです。39歳のとき、フランスの革命軍がウィーンに攻め込んできた1809年に作曲されました。ベートーヴェンは、ある時、街を歩くフランス兵に向かって、「対位法ほど兵法を知っていたら、お前たちに目にものみせてやるのだが」とこぶしを振り上げて怒り、ある時は、砲声から逃れて地下室に入り痛む耳に枕をあてながらじっと人類の平和について考えていました。彼は、このときを契機に、「エグモント」（1810）や「シュテファン王」（1811）や「ウエリントンの勝利」（1813）といった愛国的な作品を書くことになります。その一つともいえるこの協奏曲の初演は、1811年11月28日、ライプツィヒのゲヴァントハウスでおこなわれ、超満員の聴衆を熱狂させました。「皇帝」の名称は、この曲のあまりの偉大さに感激した聴衆の一人が思わず立ち上がり、「音楽の中の皇帝だ」と叫んだことに始まるとされています。

第１楽章でフル・オーケストラが「ジャ～ン」と主和音を奏でます。モーツァルトの「魔笛」の序曲と同じ、人類の理想を示す「変ホ長調」です。「英雄交響曲」も、シューマンの「ライン」も、ブルックナーの「ロマンティッシュ」も、マーラーの「千人」もすべて「英雄的な変ホ長調」です。ここにドイツ音楽の伝統がもつ象徴性を感じます。第２楽章は讃美歌です。「交響曲第３番・英雄」の第２楽章、つづいて書かれた「交響曲第７番」の第２楽章もそうですが、当時のベートーヴェンの大曲の中間部は、どれも魂の平安を静かに祈る緩徐楽章です。終楽章はコルセットを外されたロンドです。同じ時に書かれた「交響曲第７番」（1812）がリストによって「舞踏の神化」といわれたのと同じ意味で、この終楽章はリズム・リズム・リズムです。

第１楽章（快速に）変ホ長調・４/４拍子・序奏つき協奏曲的ソナタ形式
第２楽章（ゆっくりと・少し動きをもって）ロ長調・４/４拍子・変奏曲形式
第３楽章（快速に）変ホ長調・６/８拍子・ロンド・ソナタ形式

《交響曲第８番》ト長調　作品88

アントニーン・ドヴォルザーク（1841－1904）作曲

「ボヘミア人は枕の下にヴァイオリンを入れて生まれてくる」といわれるほど、彼らは生まれつき音楽的な国民です。ボヘミア（今のチェコ）の作曲家ドヴォルザークの《交響曲第８番》も、また、美しい俗謡と舞曲のリズムと明るい和声からなるとても魅力的な作品です。1889年、彼が48歳のときにヴィソカの別荘で作曲され、翌年の２月２日にプラハで初演されました。この「第８番」の楽譜は、これまでのベルリンのジムロック社からではなく、ロンドンのノヴェロ社から出しました。「ロンドン」の名前で呼ばれるのはそのためです。でも、曲の内容とは無縁です。

この曲には、ドヴォルザークの良いところがすべて出ています。精神的な気高さと純粋で繊細な感受性は、例えば、同時代のワーグナー（1813－1887）の楽劇の暗く耽んだ情欲賞賛とは驚くほど対照的です。また、彼の恩師ブラームス（1833－1897）のしかめっ面で禁欲的で厳格な音楽とも違って、音楽全体が晴れやかな表情にあふれています。メンデルスゾーンを好んだ紳士と淑女の国イギリスが、ドヴォルザークを深く愛するのも、この美しく歌う旋律と節度を守った優雅な身のこなしのゆえだと思われます。これほど「耳の喜び」を感じさせてくれる音楽はほかにありません。オペラの時代といわれる19世紀にあって、絶対音楽である交響曲がい